

《論文》

恒藤恭と矢内原忠雄

関 口 安 義

はじめに

近代日本の激動期を誠実に生きた二人の知識人、——恒藤恭と矢内原忠雄には、共通項が多い。わたしは近代日本の知識人の思想史・精神史を長らく追ってきた。この場合、同時期に上京し、当時の日本を代表した第一高等学校（旧制）に入学、三年間を過ごした青年群像を把握する作業として存在した。具体的には、東京人芥川龍之介を中心に、上京組に照準を当て、その青年群像を後年の生き方とも合わせ、考えることにあった。

恒藤恭は、法哲学・世界法が専門であり、第二次世界大戦後、大阪市立大学初代学長として理想の学園を築いた人である。また、一高時代の芥川龍之介の親友としても知られ、文学研究の側面からは大事な人物とされ、光が当てられてきた。一方、矢内原忠雄は恒藤恭・芥川龍之介らと同時期に一高生活を送り、後年経済学者として植民政策研究に大きな業績を残し、戦後は東京大学総長として大学行政に功績を残した。また、無教会主義のキリスト者として伝道雑誌『通信』『嘉信』を刊行、死の直前まで預言者的発言を続けた。

恒藤恭は時代の嵐の中で、1933（昭和8）年の京大事件を闘い抜き、矢内原忠雄は1937（昭和12）年の矢内原事件で大学を追われるが、以後戦時下の弾圧にもめげず、その信念を貫き通した。この二人を比較・対照することで見えてくるものはなにか。時代の嵐の中での毅然とした抵抗、戦時下のきびしい弾圧の中での闘い、戦後の教育改革、——特に新しい大学構想・運営に果たした二人の役割、さらには戦後平和運動のリーダーとしての二人の存在に光を当てたい。そのことは取りも直さず、近代日本の思想史・精神史を考えることにもつながるのである。

I 地方からの上京組

恒藤恭と矢内原忠雄の二人は、共に地方から上京し、第一高等学校で一緒になるという当時の優秀な地方中学出身組に属する。漱石の小説『三四郎』の主人公が代表する、当時の上京組の知的青年であった。

恒藤恭（旧制井川恭）は、1888（明治21）年12月3日、島根県松江市の内中原町14番地^{うちなかはら}に父井川精一、母ミヨ（美代）の次男として生まれた。父は官吏であった。天皇制国家としての日本が、急速に形を為していった時代である。翌年の1889（明治22）年2月には、大日本

帝国憲法が、続いて1890(明23)年には教育勅語が發布され、国民は天皇の臣民と位置づけられ、国体精神が強調された時代である。恒藤恭は島根師範附属小学校高等科を経て、島根県立第一中学校(現、島根県立松江北高等学校)に入学、卒業後、四年間の闘病生活を経て、第一高等学校に試験入学した。

松江は宍道湖と中海とにはさまれ、大橋川によって南北に分断された水郷の町である。宍道湖の日没風景の素晴らしさでも知られる。松江は徳川幕府の親藩松平氏の城下町で、松江城、通称千鳥城とよばれる美しい城を持つ。町のどこからも眺められるという松江のシンボルである。この町を恒藤恭は生涯誇りとした。彼が後年、失恋の痛手を抱えた親友芥川龍之介を松江に誘い、各地を案内するのも、この町を誇りに思っていたからに他ならない。彼に「松江美論」⁽¹⁾というエッセイがある。井川恭の松江に寄せる愛情が語られた文章である。参考までに引用しよう。

松江から湖と川とを除き去つたら後に何が残るだらう? まことや市の生命は水にある、かの碧き水にある。

若し旅人が日暮れて停車場に着き、和多見うらから小船を傭うて、大橋の橋影黒く水に砕けぼそ眉月の光銀砂をこぼすころ、大橋川を横切つて東の水門を潜り、兩岸の灯び水に落ちては夜の静けさに泣き暮れる京橋川をさかのぼつて一と夜の宿をもとめ、あくる朝はうすい舷や撓へた櫓の腹に未だしと露置くころほひ西の水門からみづうみのあかつきの霧をわけて大橋のたもとにつき、小蒸気の甲板から町々をかくすほの白い霧のうえに浮ぶお城をかへりみしつゝ西へ向うたならば、彼の記憶には松江はどんなにかうつくしい郷として残るであらう!

これは堀と川から成る松江という街の特色を的確にとらえた見事な文章である。松江の街には、今は埋め立てられて少なくなったものの、かつては掘割が縦横にめぐらされていたのである。そして宍道湖は穏やかな平和な湖であった。

一方、矢内原忠雄は1893(明治26)年1月27日、愛媛県越智郡富田村大字松木^{まつぎ}(現、今治市松木)136番地の2に、父矢内原謙一、母マツエ(松枝)の四男(二人の兄は夭折)として生まれた。父は医師であった。矢内原忠雄は地元の富田尋常小学校・河南高等小学校、そして神戸の雲中尋常高等小学校を経て、神戸中学校(在学中に第一神戸中学校、略称神戸一中と校名変更。現、兵庫県立神戸高等学校)に入学、卒業と同時に無試験検定で第一高等学校に入学する。

生地は今治在の旧富田村は、頓田川左岸の地にあり、瀬戸内海に面する豊かな農村地帯であった。今治はもと藤堂氏、続いて松平(久松)氏の3万石の城下町で、現在はタオルと造船・海運の町として知られる。忠雄の出生の地、富田村松木は、今治の中心街から約四キロの地にあつ

(1) 井川恭「松江美論」『松陽新報』1913年8月31日～9月11日

た。村内には拝志川という田の中を流れる小川があった。忠雄はこの小川をことのほか愛し、「拝志川」という5行16聯の詩⁽²⁾まで作っている。その最後の六聯は、以下のようなものである。

去年の夏見し川なれど
去年に聞きたる水なれど
歌はず言はずたゞ一人
母をしたひてさまよへば
涙にあまる思かな

家に残りて楽しさを
母と語らんすべもなし
入相の鐘なるときは
出でてさまよふ拝志川
自然の母の乳を吸ふ

見よ美しき黄昏の
神秘に映ゆる夕雲を
聞けなつかしき小流の
愛をさゝやくさざめきを
天地歌ひ人黙す

自然は偽ることあらじ
肉の衣は失せしかど
花鳥森に小流に
隔てぬ和ぎ胸に満ち
恋ひつ慕ひつ母を見る

夏の日山に沈み行き
大空ひたす黄金の波
水田に映ゆる黄金の雲
かしこ讃美の故里に
我等の遭ふも程近し

(2) 矢内原忠雄「拝志川」(学生時代の詩) 矢内原伊作『矢内原忠雄伝』白水社、1998年7月23日収録。
212～213ページ

夕もや四方をこむる時
 螢柳に光る時
 あまきやさしき秘め言に
 母なきわれの母となり
 闇に消え行く拝志川

この歌は、母恋の歌である。母松枝の死は、忠雄の一高時代の1912(明治45)年3月22日のことである。生家の家の近くを流れる拝志川に、彼は母の面影を重ねているのである。若き日の矢内原忠雄の抒情が流れ出た詩である。忠雄には豊かな文学的感性が備わっていた。また何よりも文学が好きであった。この点恒藤恭とも重なる。恒藤恭も中学時代から文学を好み、『ハガキ文学』に投稿入選し、一高時代には『中学世界』や『教育学術界』に、鈴かけ次郎のペンネームで連載の少年小説をしばしば載せるまでになる。

二人ともに書くことが好きで、後年京大事件や矢内原事件後は、筆の人としてジャーナリズムの世界でも活躍する。第二次世界大戦後は、二人とも憲法擁護と平和への願いを、その筆に託すことになる。

II キリスト教の受容

恒藤恭と矢内原忠雄は、共にキリスト教の強い影響下に育った。恒藤恭の生まれ育った松江には、1885(明18)年イギリス教会宣教会からエヴィントンという宣教師が、次いで同派のバックストンが来て伝道をはじめ、以後松江にキリスト教を広めることになる。いわゆる松江バンドである。日本では聖公会と呼ばれる教派として成長した。

恒藤恭、当時の井川恭が聖書を学ぼうと思ったのは、姉シゲの夫である佐藤運平の突然の死にあった。当時中学三年生であった恭は、尊敬していた義兄の死に際して、人生の無常を悟ることになる。彼は日本聖公会松江基督教会の専任司祭で、島根一中の英語の教師も兼務したオリバー・ナイト(Knight, Oliver)から聖書を学ぼうと英文の聖書、THE NEW TESTAMENTを町の書店で購入、以後、毎週金曜日の午後、ナイト宅で行われていた聖書研究会に出席するようになる。THE NEW TESTAMENTは、オックスフォード大学出版部刊、本文は欽定訳聖書の改訳である。英語を得意とし、親しんでいた彼には、よく分かるものであった。後年、第一高等学校時代に親友となる芥川龍之介に彼が贈った聖書は、これと同じもので、現在東京駒場の日本近代文学館芥川龍之介文庫に見出せる⁽³⁾。

日本聖公会松江基督教会には、井川一家が通い、姉のシゲやセイをはじめ、母のミヨ、それに妹のサダも受洗している。が、恭は受洗には至っていない。後年彼はナイト牧師から聖書を

(3) 関口安義「一冊の聖書の背景」『キリスト教文学研究』第14号、1997年5月10日、のち『芥川龍之介の復活』洋々社、1998年11月28日収録。55～75ページ

学んだことを回想し、「私は早くから新約聖書のなかにしるされているさまざまな聖訓や物語などに親しんだものであったが、ついにキリスト教の信仰をうけいれるには至らなかった」(「いちばん会いたい人—亡き母—」『大法輪』1967・4)と書くことになる。井川恭のバイブル・クラスの師、オリバー・ナイトのことは、『日本聖公会松江基督教会百年史』⁽⁴⁾にくわしい。

井川恭のキリスト教とのかかわりは、中学時代で終わったのではない。彼が中学卒業後、消化器系の病で入院療養した神戸衛生院は、キリスト教系の病院、——正確に言うならば、プロテスタント教会の一派、セブンスデー・アドベンチストの経営する医事伝道機関であった。恭はこの病院で五十六日に及ぶ入院生活を送った。その記録を彼は日記、および小説に入念につづっていた。近年大阪市立大学恒藤記念室編で『恒藤記念室叢書 1 井川天籟「大空」／井川恭「神戸衛生院日記」』⁽⁵⁾として、広川禎秀と古澤夕起子の要を得た解説付きで翻刻されたので参照して欲しい。井川天籟は井川恭のペンネームの一つである。

神戸衛生院はキリスト教伝道も兼ねた病院であり、早天礼拝と称して朝早い時間に礼拝を持っていた。彼はこれに出席し、キリスト教の世界にかなり接近する。退院する女性患者の送別会での祈祷会のことを記しては、「聖霊は人々の頭に下つた」とキリスト教体験者のようなことばさえ用いている。また、神戸衛生院で井川恭は、後年の『白樺』の作家^{こおり}郡虎彦と出会うことになる。くわしくは小著『恒藤恭とその時代』⁽⁶⁾に譲るが、若き日の謙虚で信仰に燃えた純な青年郡虎彦との出会いは、井川恭に大きな影響を与えた。

井川恭とキリスト教とのかかわりは、一高時代も続く。一高では同級生長崎太郎と知り合うことで、信仰とは何かを改めて問うこととなる。長崎太郎もまた、地方出身の優秀な青年であった。高知県安芸郡安芸町(現、安芸市)の生まれ。高知県立第三中学校(現、高知県立安芸高等学校)を経ての入学で、第一部乙類(英文科)無試験検定順位一番の入学であった。⁽⁷⁾恒藤恭の長崎太郎とのかかわりはこれまた深い。芥川龍之介とのかかわりが、一高時代を中心に青年の一時期に限られたのに対し、長崎太郎との交流は、その生涯に及んだ。二人は一高卒業後、京都帝国大学法学部に進学したこと、一時期共に京都大学に勤務したこと、そして第二次世界大戦後は、二人はこれまた共に公立大学の創設(長崎太郎は、京都市立美術大学の学長)に携わったことなど、その共通項は多い。

長崎太郎は後年「行じて居るもの」⁽⁸⁾というエッセイで一高時代を回想し、「当時私は英文科の生徒で、一高の自治寮で恒藤恭君(現大阪市立大学学長)と相識ようになり、信仰に就いて熱心に語り合った。私はあらゆる点で、恒藤君の指導を受けたが、信仰の話になると常に受け身で、同君の鋭い批判に耐える事が出来なかった。卒業の前には、二人で弥生ヶ岡の下宿

(4) 『日本聖公会松江基督教会百年史』日本聖公会松江基督教会、1986年5月30日

(5) 『恒藤記念室叢書 1 井川天籟「大空」／井川恭「神戸衛生院日記」』大阪市立大学大学史資料室、2011年3月31日

(6) 関口安義『恒藤恭とその時代』日本エディタースクール出版部、2002年5月30日。62～69ページ

(7) 『官報』第8137号、1910年8月5日の「学事欄」による

(8) 長崎太郎「行じて居るもの」『現代と仏教』第8号、1956年11月1日

の一室に同居して基督教に就いて論じ合った。聖書も一緒に読んだ」と書いている。一高最後の学期は、長崎太郎と小石川上富坂の日独学館に過ごす。この学館は、三田の統一教会牧師で一高のドイツ語教師でもあった三並良が、ドイツ人教会の牧師エミール・シュレーデルとの共同経営で建てた学生寮である。シュレーデルは東郷坂にあったドイツ人教会へ通っていた。井川恭が長崎太郎や芥川龍之介や藤岡蔵六と、この教会に出席したことは、井川の日記「向陵記」からも分かる。

他方、矢内原忠雄の生まれた地は、基督教の伝道の盛んな今治町に近い旧富田村松木であった。今治の中心地にあった今治教会の設立は、『日本キリスト教歴史大事典』⁽⁹⁾によると、1879 (明治12) 年9月21日で、今治は市の宣伝パンフレット「海事都市いまばり」がうたうように、戦前は「基督教の町」として全国でも有名であった。プロテスタントの今治教会の初代牧師は、徳富蘆花の従兄弟に当たる同志社を出た横井時雄であった。横井は熱心に教会を指導し、やがて会員数400人という、四国を代表する教会に育て上げている。

矢内原忠雄の「私は如何にして基督信者となつたか」⁽¹⁰⁾には、「私の郷里の今治は明治初年から基督教が伝はり、殊に横井時雄氏の伝道地として有名でありました。併し附近の農村には殆んどその影響がなく、私の村には一人の基督信者もありませんでした」と書く。が、信者はいなくとも教会に出席したり、当時盛んだった路傍伝道での話を聴いたり、そうした折に、配られる聖書をもった人は、松木の地にもいたことであろう。右の文章には、最初に聖書を読んだのは、腹違いの姉文代が持っていたものであったとあるが、この聖書も、時代からして今治教会との関わりあつてのことのように思われる。確かに開明的な町と異なり、旧弊を脱さない農村部における布教は難しいものである。けれども、基督教の存在そのものを忠雄が知ったのは、生い立ちの地であったはずだ。

彼が学んだ神戸中学校も、また基督教とかかわりを持っていた。在学時代の校長鶴崎久米一が、ウィリアム・スミス・クラークが教頭として勤務した札幌農学校出身で、クラークに倣った教育を行っていたからである。後年矢内原忠雄はこのことを誇り混じりに書いたりしたが、在学当時は基督教との直接のかかわりはなかった。彼が基督教について真剣に考え、受け入れるのは、後年の一高時代、一高基督教青年会に所属し、内村鑑三門に入って以降のことであった。

恒藤恭も矢内原忠雄も青年時代基督教と無縁でなかったのである。ふたりは一高時代基督教に関しての議論もしている。1911 (明治44) 年6月2日の矢内原忠雄の「日記」⁽¹¹⁾に、そのことが記されている。理論家恒藤恭は、基督教に関しては、常に客観的立場に立つ。それに対して矢内原忠雄は、宗教は主観的なものと考えている。そこに二人の違いがあった。

(9) 日本キリスト教大辞典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988年2月20日

(10) 矢内原忠雄「私は如何にして基督信者となつたか」『通信』第18号、1934年6月、のち『矢内原忠雄全集』第26巻収録。140ページ

(11) 矢内原忠雄「日記」明治44年6月2日、のち『矢内原忠雄全集』第28巻収録。110ページ

Ⅲ 一高時代 —— 新渡戸稲造校長と蘆花「謀叛論」

すでに述べたように、恒藤恭と矢内原忠雄は、ともに1910（明治43）年9月第一高等学校の門をくぐり、三年間を過ごす。しかも最初の一年間は、南寮に寝起きを共にした仲間であった。当時の一高の寮は、一室が12名であった。他の10名の学友は、恒藤恭の「向陵記」⁽¹²⁾が記録しているところによると、渋澤直一（群馬）・牧田弥太郎（大分）・三溝又三（岐阜）・小池四郎（東京）・武田章一（静岡）・森田浩一（東京）・前田仙太郎（愛知）・都築正男（兵庫）・水澤雄三九（新潟）・山岸博愛（埼玉）である。東京出身者は2名、他はすべて地方出身者である。先にも述べたが、当時の一高は、地方出身者が多かった。今言うところの全国区の学校であった。寮はその意味でも必要だったのである。恒藤恭と矢内原忠雄とは、ベッドを「一つおいてとなり」⁽¹³⁾であった。

恒藤恭と矢内原忠雄が入学時の一高の校長は、新渡戸稲造である。新渡戸稲造は1862（文久2）年8月3日、南部藩士の子として盛岡に生まれた。札幌農学校の二期生であり、その学問・教育の根底には、キリスト教の信仰があった。彼はすぐれた学者であったと同時に、傑出した教育者でもあった。矢内原忠雄は入学式での新渡戸の講話から真実を見出していた。神戸一中時代から先輩川西實三の影響もあって、彼は新渡戸に惹かれていた。もっとも新渡戸ファンは、1910（明治43）年9月入学の新入生には多かった。

文科の芥川龍之介も井川恭も松岡譲も成瀬正一も、そして藤岡蔵六もそうだった。藤岡蔵六の回想記『父と子』⁽¹⁴⁾には、「新渡戸校長」の章がある。そこで藤岡は「概して無味低調な授業の中、新渡戸校長の修身講話だけが光っていた。農学博士法学博士新渡戸稲造先生は、毎週一回一年生全部を講堂に集めて、修身講話をされた。私は非常な興味を以てそれを傾聴した」とある。こうした生徒は一高には数多くいた。藤岡はさらに語を継いで、「先生は申分の無い立派な紳士であった。日本に於ける知識層の最高連峰の一つであり、国際的文化人として不拔の地歩を占めて居た。私達の眼を国際的に開き、自由を愛し平和を喜ぶ気風を養い、偏狭なる愛国主義や固陋なる国粹論に陥ることを防いだのは、先生の感化力に負う所が頗る大きい。私は一高三年間を斯かる名校長の下に過ごし得たことを喜び且つ感謝して居る」と書く。

が、一方で新渡戸は、学内の保守派や国士的卒業生の一部から排斥の声が挙がっていた。新渡戸校長攻撃の声は、彼らの入学以前からあった。矢内原忠雄の「人及び愛国者としての新渡戸先生」⁽¹⁵⁾から、一部を引用する。

(12) 大阪市立大学大学史資料室編『向陵記——恒藤恭 一高時代の日記——』大阪市立大学、2003年3月31日

(13) 注12に同じ。10ページ

(14) 藤岡蔵六『父と子』私家版1981年9月（日付なし）。151～153ページ

(15) 矢内原忠雄「人及び愛国者としての新渡戸先生」『東京女子大学同窓会月報』第4巻、第1号、1938年2月、のち『矢内原忠雄全集』第24巻収録。688ページ

当時の第一高等学校は今日以上に世間の注目をうけてゐたのである。而して寄宿寮に立籠つて世間と一緒にならないといふ籠城主義が掲げられて来たのである。所に新渡戸博士が京都大学教授から第一高等学校長になつて来られた。様子を見てもハイカラだ。西洋人が奥様である。学校外の多くの会合に顔を出す。身を処する事が軽々しいといふ批評が起つた。当時先生は『実業之日本』に毎号修養談を出された。そこで通俗雑誌に下らない事を書いてゐる、卑近な道德を説いてばかりゐて校長たる職を空しくして居る、原稿料をかせいでゐる、売名、八方美人等と、新聞雑誌に罵詈譏^{ばりざんぼう}されて、先生攻撃を看板にする雑誌さへあつた。

校内に於ても排斥の声は起つた。私の入学の前であつたが、或年の記念祭の夜の全寮茶話会で激しい排斥演説が卒業生及生徒の或者から出て、先生は八方美人で一高校長たる資格はないから引込んでどうかといふ演説が為された。其の時の記録を見ると、先生はガウンを着てニコニコしてをられ、「その様悠容として常に異らず」と書いてある。その時先生は校長として自己の信念を披瀝せられたので生徒も先生の人格に触れて、校長排斥の会が心から先生を仰ぐ会に変つてしまつた。その頃自分はまだ中学生であつたがこの事の記してある一高の校友会誌を先輩から送られ、自分も一つ勉強して一高に入らうと決心した次第である。

新渡戸稲造排斥運動は、やがて新渡戸の校長辞任という事態を迎える。そのことは後に取り上げる。その前にどうしても記しておかねばならないのは、新渡戸が文部省から譴責処分を受けることとなる蘆花の演説「謀叛論」とその波紋である。

「謀叛論」とは、井川恭や矢内原忠雄らが一高に入学後半年の1911(明治44)年2月1日、一高第一大教場で行われた弁論部主催の講演会で行つた、徳富蘆花の講演題目を言う。蘆花は前年5月に起こった大逆事件に対して、政府の取った処理のまずさ、——社会主義者や無政府主義者に対する弾圧事件を激しく攻撃したのである。明治天皇暗殺計画という容疑で多数の社会主義者が逮捕され、非公開裁判の下、幸徳秋水ら24名が死刑の判決を受け、うち12名が早々処刑されたことに蘆花は激しい怒りを覚える。彼はその憤懣を、「謀叛論」という文章に凝縮し、一高生に語つたのであつた。演説(講演)に託した抗議の叫びは、多くの一高生の心を捉えた。

この演説を井川恭が当日の日記にくわしく記録していたことを、わたしはいち早く確かめることができた。井川は「向陵記」と題した大学ノートに記された日記のⅡ(「向陵記Ⅱ」)の、1911年の「二月一日」の箇所に、「謀叛論……徳富健次郎氏」との見出しを添え、三枚半ものページを用いて記録を取っていたのである。それは現在、大阪市立大学大学史資料室編の『向陵記——恒藤恭 一高時代の日記——』(大阪市立大学、2003・3)に見ることができる。他方、矢内原忠雄もまた蘆花の演説「謀叛論」を当日の日記に記していた。その関連箇所を、ここに写し取ろう。幸いこの部分の日記は、『矢内原忠雄全集』第28巻(岩波書店、1965・6)に見

出せる（全集の日付は「二月二日」となっているが、「一日」の誤りである）。

徳富健次郎先生壇上に立たる。先生は武蔵野の一隅に蟄^{もつ}して鳴かず飛ばざること多年、今より四年前、この壇上に立たれて「勝利の悲哀」を叫ばれてより、杳^{よう}として消息を聞かず、自らトルストイに私淑して田園生活を営んで居らるゝとのみ。先日委員先生の居宅を訪ひて演説をご依頼せし処、頃日思ふ処あり、一高は鬱したる気をはき出すにはよき処なりとて快諾せられたるなりといふ。先生の人格を憧憬する一千校友は勿論、多数の大学生其他学生、場に溢れ、外面より窓にすがりて、大人の聲咳^{けいがい}に接せんとせり。畔柳部長^{くろやなぎ}の紹介の下に壇上に立たれたる人——これこそ我等が敬愛する蘆花先生なれや。豊肥の体にて血色よく、色眼鏡をかけ紋付の羽織を着し、風采堂々たらずとせず。この場に於て始めて知りたる演題は「謀叛論」。先生の平生を思ひ演題を思ふ時吾人はその大体を推察せるが如き心地せり。然れども大人の説く処は何ぞ。蘆花先生大逆事件に関して如何の感想をか抱かれたる。先生は新局面の発展には志士の必要なるを謂ひ幸徳等は志士なりとの口吻をもらし、当局者の老朽の身を以て若き生命を圧せんとするを叫び「人」といふことを観念の中に入れざるを責められたり。

蘆花の「叫び」を、矢内原忠雄は「偽りなき美しき修辞」「熱烈なる精神の煥発」と表現した。わたしはこれまで芥川龍之介とその周辺の青年群像をとらえるのに、蘆花の「謀叛論」は落とすことのできない重要な意味を持つとし、長い期間、考え続けてきた。周辺の人々の日記を調べ、彼らの意識から〈同時代青年と「謀叛論」〉という課題を抽出し、やがて激動の時代を迎える中で、彼らが謀叛の声を挙げるにいたるプロセスには、共通項がある。恒藤恭と矢内原忠雄との場合も同様である。

さて、蘆花の「謀叛論」演説は、すぐに文部省の役人の知るところとなり、翌日2月2日には早くも新渡戸校長が文部省からの呼び出しを受けている。そして2月3日の全校集会となるのであった。これにはほとんどの生徒が出席している。恐らく出欠もとったことだろう。学校側は呼び出しの効く全校生徒約1000名を午前8時30分に校庭に集合させ、すぐ第一大教場に導き、問題の経過を説明した。講演会に出なかった者も、級友から蘆花演説の大意は聞いていたから、欠席者はほとんどいなかった。南寮十番の恒藤恭も、矢内原忠雄とその仲間も皆出席する。演説には出席しなかったが、余りにその反響が凄いのを知った森田浩一も出席した。森田の一高時代の日記は、近年『森田浩一とその時代～日記を通して見えてくるもの～』として、福生市郷土資料室が復刻している⁽¹⁶⁾。森田は2月2日の日記に、「弁論部に徳富健次郎氏来て大いに社会主義賛成演説をやつたと云ふ。その事で明日八時半、校庭に集つて新渡戸先生の否定演説とかやるのを聞くのだ相な」とあり、2月3日の全校集会が早朝8時半から行

(16) 福生市郷土資料室編『森田浩一とその時代～日記を通して見えてくるもの～』福生市教育委員会、2001年1月25日

われたことを書きつけ、さらに以下のように記している。

八時半校庭に集合、すぐ倫理講堂に飛び込む。後から後から来るので前の方は、一寸のすきも無くなつた。大沼さん（筆者注、大沼浮蔵。一高の体育教員）が大声でもう少し後へ下がれとドナツタが皆きかず。前からは入れぬ様にして漸やく静まつた。さんざ待つてから校長を初め諸教員が着席、校長は演壇に上つて約一時間に渡る社会主義反対演説をやつた。我一高生徒にして少しでもコンナ説をいだかない様にと云つて壇を下りた。

同じ新渡戸演説を記録した井川恭の日記『向陵記』は、全校集会のようすにふれ、「問題は一昨日の徳富氏の演説についてである」と記し、続けて新渡戸校長の全校生に対しての訓話を感想抜きに記録している。井川恭は、以下のように記録している。「（蘆花）氏のされた言論についてハ責任はないが、氏を招いたのは全く吾輩一人の責任である。吾輩は客を招いておいて、あとで陰口をいふのハ潔しとせぬ所である。自分は氏の言論についての批評はこゝろみない。たゞ学校のこれに対する態度を明らかにしておきたい」と言い、「客が家風に合はぬ話をされたとき、家長たるものハ、わが子の為に誤解のないやうにさとさねばならぬ」と語ったとある。他方、矢内原忠雄の日記の記述は、以下のようだ。

九時より生徒一同を倫理講堂に集めて新渡戸先生の訓諭あり。勿論蘆花先生の演説に就てにして護国旗下にそだてる我等には、過激の言語を以て思想を左右せられざるだけの冷静なる判断あるべきなり。本職は徳富氏の陰口を聞くものにあらざれども、外客が家風に異なりたる話をなして去らば、その家長たるものは、その家長に異れる旨を子弟に告ぐるは当然のつとめと信ず。而して今般の事件につきては本職は既に取りるべき道を取りたり。二三職員諸氏も責を分たんといはれしもそれにも及ばずとて之を断りたり。諸君に迷惑はかけさせぬによりて安心して勉強せられよ。而して護国旗下に育つ青年なるを思へよと。

言々莊重にして鳴咽するものあるに至る。思ふに新渡戸校長は既に進退伺を呈出せられたるならん。われらはいはば冷静なりき。決して思想動揺せるを覚えず。されど事既に文部当局の耳に入り、先生又進退伺を呈出せられし上は今後如何になりゆくかと、非常に心配される。新渡戸先生辞職の様なことはとてもなかるべく、又ありたりとせよ、僕がきかぬ、一高生がきかぬ、一高の先輩がきかぬ、どうぞ無事で納まります様に。

この日の全校集会は、一高生ひとり一人に大きな記憶となって残った。成瀬正一は一年半後の1912（明治45）年7月19日の日記に、「私が一年の時、徳富蘆花氏の話の後で校長が吾々生徒を講堂に集め、赤色の地に白く橄欖と柏葉及白線二條を縫いとつてある一高の護国旗をかざして、自分は教授服を着て、蘆花氏の説について誤解なき様さとされ、涙を流してかくの如くなつたのを嘆かれた時には、私は良校長、吾々一高生としての校長たるべき人と思つた」と

書く。森田浩一の「浩一日記」は、蘆花の演説を聴かなかった者にも、強い余波を与えたことにも言い及んでいる。

校長演説、続く『萬朝報』紙の報道（1911・2・5）などもあって、一高生で事件を知らない者はまずおらず、ひとりそうしたことに超然としていられるような雰囲気ではなかった。松岡譲は後年の回想記⁽¹⁷⁾で、「其頃は特に非常に保守的なあの学校の事だから、所謂国士的の連中も多く、それらはこの演説に後で反対の態度をとつた」と述べ、「賛成不賛成二派に分かれて至るところで議論の花が咲いた」とも書いている。

1913（大正2）年4月23日、水曜日。各新聞に一高校長新渡戸稻造の免職、後任に文部省視学官の瀬戸虎記が就任したという記事が載る。これは当時の一高生にとって、衝撃的事件であった。新渡戸は前年秋にアメリカから帰国した後、健康がすぐれず、帰朝歓迎会の席上辞意を漏らしてはいたが、まさかの思いが多くの寮生にはあった。井川恭（恒藤恭）の当日の日記「向陵記」には、以下のようにある。

新渡戸校長が免ぜられて、文部視学官瀬戸虎記氏が任命に成つたといふ記事が各新聞に出た。大に憤慨する。学校へ出ると、午后学生大会をひらいて、横暴なる文部当局の責をとふといふ檄が銅像の前に立ててあつた。

午后嚶鳴堂は一杯の人であつた。二、三人の反対者の外、十数人の人々が立つて、校長復職を叫び、採択の結果十五、六人の少数をのぞき満場一致で復職運動をなす事になった。議長井上君（注、井上庚二郎）の態度は立派であつた。

矢内原忠雄もむろんこの学生大会に出席していた。「忠雄日記」には学生大会の様子を報じ、「新渡戸先生の復職を期する旨を満場にはかれり。十数名壇に立てり。二三の人が先生を校長として不適任なり其他の理由にて復職運動に反対するものありしを以て余も登壇せり。文部省を責むるはみな一なり。遂に委員の決議案を迎ふ。会散じて後石井君（注、石井満）と共に新渡戸先生を訪問す」とある。一高時代の矢内原忠雄はとにかく積極的な学生生活を送っていた。彼は頭の回転の早い学生であり、思うことあれば、こうした席でも臆せず手を挙げ、意見を述べる事が出来た。それは神戸一中時代からの彼の身に付いた習慣であり、意見を述べるタイミングも巧みであった。しかも、一高弁論部で鍛えた滑舌と声量も申し分なかった。彼は友人付き合いもよく、仲間からは信頼されていた。と同時に、何事にも行動的なその態度を、苦々しく思う一高生がいたのも事実である。そうした忠雄の目立った行動が、やがて倉田百三の矢内原批判を喚ぶことになる。

臨時総大会では、矢内原は新渡戸事件にかかわる実行委員に選ばれている。4月25日の井川恭の日記（「向陵記」）には、新渡戸の辞任に至る成り行きと、学生大会が復職運動を止めた

(17) 松岡譲「蘆花の演説」『政界往来』1954年1月1日、のち『漱石の印税帖』朝日新聞社、1955年8月5日収録。228～229ページ

ことが、理路整然と述べられている。引用しよう。

昨日、寮の委員が文部省を訪うて大臣奥田義人氏及び福原次官と会見した顛末が新聞に出てゐた。

十時前校長の訓示があると云ふので、講堂に集まつた。

先生は、なほ事務引つゞきの為であるとして、教授服をきたまゝ壇に立たれた。

先生は諄々と説きはじめられた。年十六のとき、明治天皇が先生の家に行在したまひ、一家のもの共に拝謁をたまはつた。その時以来先生は志を立てゝ、国家のため、新国土開拓のため一生尽さむことを決心され、札幌農学校へはいられ、それから米国の大学に三年、ドイツの大学に五年、農学を修められ、帰朝して札幌農学校の教授となられたが、京都法科大学へ木下総長の懇望により、その知遇に感じてうつられた。しかるに又、牧野文相の懇望により、又その知遇に感じて一高の校長となられた。はじめは二年くらのつもりでゐられたのが、とうとう足がけ八年もをられる事になつた。

そのはじめ、文相は、校内の事務をみるにはそれぞれ事務吏あり、校長は更に大なる教育に従つてもらひたいと約束した。しかるにその後、世間にハ、先生が他の事業に心をわかつて、校長の務めに専らで無いといふ批難をはじめた。それから一高の気風が衰微し墮落したのは、先生の罪であるといひ出すものも出てきた。加ふるに先生が、国家の命を奉じて、米国に交換教授として赴かるゝや、先生の曠職をそしめるものが多く、去年の夏の校長排斥記事が新聞にあらはるゝに及んで先生は憤然として帰られた。そして、第二学期の全寮晚餐会に辞気激したる演説をされ、且つ文部省に辞表を出された。それで委員はその事をきいて、文部省をとつてその辞表の公式ならざる事、且つ当局はなる可く先生の留任を希望する意思なる事をたしかめ、一方先生に留任を乞うた。先生も健康を害せられ、且つ専門の学問もおくれたため、静養をのぞんでゐらたのであるけれど、それほどまでに思つて呉れるのならバ、世間の批難も何もかまはずに、みなと一緒にやつて見たいと思はれた事もあつた。

その後先生は、文部省へ辞表きゝ届を乞はれたが文部省は応じなかつた。メービー博士と満鮮にゆかるゝまへにも当局の意思をたづねてゆかれた。しかるに今回、先生をよんで相談して、先生の辞表をきゝ届ける事になつた。

それまでの成りゆきを事理あきらかにのべて、之がまだ職に在る間であつたならバとも角、已に勅許をもつて辞令の出た今日では、我輩は決して復職するやうな事はしない。それでもしゐると云はれるならバ、我輩の屍をふんで、当局に迫つてもらいたい。この場合ハ是非おだやかに運動をやめてもらひたいと言はれた。

僕は、たゞ涙が出てしやうがなかつた。

午後、学生大会をひらき、復職運動の廃止を決議した。

5月1日の新旧校長の送迎会のことは、これまた井川恭の日記（『向陵記』）が詳しく記す。矢内原忠雄もまたこの日の日記に送迎会の印象を語っている。そこには「此の日はわれらの最もしたひ奉る新渡戸先生を送る日なり。校長より先生を失ふことの惜しさよ。名残をしさよ。とても大学生などの感じる所にあらず。三時半より嚶鳴堂にて新旧校長の送迎会あり。先生の御話は例によりて実によりき。生徒演説も大抵よかりき」とある。

その夜は食堂で晩餐会があった。八時半に終え、有志は新渡戸を小石川の自宅まで徒歩で見送ることになる。忠雄もこの日の日記にその模様を記しているが、忠雄の代表あいさつの姿を含めて「永い思ひ出の夜」と小見出しを施して日記（『向陵記』）に書いた井川恭のものを、ここでも引用しよう、

有志のものは、先生を先にたてて見送る。大沼（注、浮蔵、一高の体育教師）さんが提灯をもつて先生の横につく。みな先生のそばによりたがつて大さはぎ。みなもみ合うて本郷の大通りをゆく。三丁目から春日町へ折れる。雨ははれたが、みちはぬかるんでゐる。

僕たちの心はもう先生を思ふ情ではりきつてゐた。空はくらく、ともしびは、うつくしくかゝやいてゐた。

とうとう小日向台町の、先生のお宅に来た。ドカドカと、砂利のしかれた庭にながれいる。かゝやかしいあかるい玄関にハ、うちの人バラバラとかけ出る。先生の奥さんが、にこにこしてでられる。先生と奥さんとハ、ならんでたゞれる。みなはひざまづいて、送別のうたをうたふ。僕たちの眼にはもう涙がわいてきた。矢内原君が感情に迫つたこゑで、なきながらわかれのあいさつをする。みなもたゞすゝり泣いた。それから先生御夫婦のため黙禱をさゞげ、全寮々歌をうたひ、万歳をとなへて、かへりみつゝなだれ出た。さゞげられた一つはいきた花かご、一つは造花のかご。奥さんがたかく花かごをさゞげて、アイサンクユーフロムマイハーツといはれたときの、その場のありさまのうつくしさは、かつてみた事のないうつくしいものであつた。

新渡戸稲造は、多くの生徒に惜しまれて一高を去った。新渡戸はまさに名校長の名にふさわしかった。井川恭や矢内原忠雄をはじめとする一高生は、よき校長に恵まれたことになる。新渡戸の感化は計り知れないものがあつたが、「若いうちに日本を出て外国から日本をよく見よ」の教えは、彼らの後年の留学体験にも影を宿す。恒藤恭も矢内原忠雄も大学に職を得たのち、共にヨーロッパ留学を体験するが、その時間の多くは、大学という制度の中ではなく、旅や美術館での名画鑑賞に費やされる。彼らが旅や美術館めぐりから得たものはいかに大きかったか。世界人としての眼は、新渡戸稲造の教えの大事な部分であつた。

Ⅳ 時代との対決 —— 京大事件と矢内原事件

一高の同級生で、フレッシュマン時代を同じ部屋で過ごし、共に蘆花の演説「謀叛論」から大きな影響を受けた恒藤恭と矢内原忠雄は、やがて時代の嵐の中で、国や大学の右翼化に抵抗し、謀叛の声をあげるようになる。それは時代との対決でもあった。恒藤恭は1933（昭和8）年に起こった同僚瀧川幸辰教授の罷免問題、いわゆる京大事件に際して文部省の弾圧に一步もひかず、学問の自由と大学の自治を主張し、京大教授の職を辞任した。いまその詳細を書くことは省くが、事件の推移と恒藤恭のとった態度に関しては、小著『恒藤恭とその時代』⁽¹⁸⁾を参照していただけるなら幸いである。

京大事件は右翼団体により、瀧川の中央大学での講演（1931年10月28日）、「トルストイの『復活』に現はれた刑罰思想」が攻撃されたのにはじまる。他方、矢内原事件は、恒藤恭のかかわった京大事件後4年、1937（昭和12）年に起こる。両事件とも言論弾圧という姿をとっていることに注目したい。京大事件は瀧川の『刑法読本』（大畑書店、1932・6）と『刑法講義』（弘文堂書房、1928・6）の二書が内務省による発売禁止処分に遭ったように、矢内原事件では、右翼学者簗田胸喜や学内の土方成美教授らからの、著書『民族と平和』（岩波書店1936・6）や論文「国家の理想」（『中央公論』1936・9）への謂れない攻撃があった。矢内原忠雄もまた東大教授の職を追われたのである。

京大事件に際して、恒藤恭はいくつもの文章を新聞・雑誌に残した。整理するなら以下のようである。

新聞

- ①瀧川事件の経過から見た大学自治の問題 『帝国大学新聞』1933・6・5
- ②京大問題について 『東京朝日新聞』1933・6・28～30
- ③京大問題の種々相 『読売新聞』1933・9・6
- ④京大問題を記念するために 『日の出新聞』（夕刊）1933・9・10

雑誌

- ①死して生きる途 『改造』1933・7
- ②或る京大学生に送る書信 『改造』1933・8
- ③総長と教授と学生大衆 『文藝春秋』1933・8

矢内原事件では、忠雄は弁明も何もできず、辞表提出後、『帝国大学新聞』（1937・12・6）に寄せた文章「矢内原教授別れの言葉」、それに個人誌『通信』（1932・12）に載せた「大学辞職の日」を見るのみである。

矢内原忠雄の時代批判から生じた、いわゆる筆禍事件は、外部の簗田胸喜らの暗躍もあって文部省や内務省でも問題化する。同僚の大内兵衛や舞出長五郎が長与又郎総長に面談し、事態をこじらせず、矢内原を護るよう進言したがうまくいかず、結局彼は大学を去るほかなかった

(18) 注6に同じ。288～316ページ

のである。

時は日中戦争の最中、太平洋戦争の前夜でもあった。日本は世界的に孤立し、大戦争の道を突っ走っていた。少し前の京大事件の際は、事件の中心の京大法学部は、佐々木惣一を中心に文部大臣の不当な大学自治への干渉に結束して立ち上がった。けれども5年後の矢内原事件では、彼の所属した経済学部の仲間同士が割れており、時局便乗の御用学者、右翼学者が跋扈していた。矢内原忠雄はそうした中で一人闘った。それはきびしい闘いであった。

恒藤恭も矢内原忠雄も帝国大学教授の職を抛った後は、筆の人として生きることになる。が、そこにも闘いがあった。内務省の表現の自由への干渉は、苛烈を極めた。二人はその犠牲者である。例えば恒藤恭のばあい、『改造』に寄せた「死して生きる途」と題された文章は、京大事件の最中に書かれたものだが、伏せ字の多い文章である。「伏せ字」とは、明記することを官権の介入によって妨げられ、その箇所が空白になることを言う。多くは該当箇所が○や×、あるいは……などのしるしで表わされた。これを検閲という。恒藤恭の右の「死して生きる途」を例にとると、伏せ字の箇所は11箇所にあつた。例を挙げよう。

- ①政府の……………（この間何字か伏字）圧迫が暴風のごとく襲ひ来つたとき、学園の平和を熱愛する者も、起つて大学の本質の擁護のために抗争せざるを得なかつた。
- ②大学教授としての職を去ることが、真に大学教授として行動する所以であるとは、矛盾であつて、矛盾でない。外部から……………（この間何字か伏字）大学の本質が否定されようとするとき、大学は進んで死することによつて自己の眞の生命に生きる途をえらぶ外はない。
- ③国家が健全なる発達を遂げ得るためには、健全なる理性が常に国家の内面においてはたらくことを要する。国家の一構成部分としての官立大学は、恰もかやうな需要に応じて、国家のために健全なる理性のはたらきを提供すべきであり、かやうな使命を果す上には、政府者……………（この間何字か伏字）に盲従することなく、むしろ之を批判……………（この間何字か伏字）せねばならぬ。

大正期の検閲は、芥川龍之介の反戦小説「將軍」（『改造』1922・1）などでは、××××で示され、何字が省略されたのかはわかったが、この時代の……………のやり方では、省略された字数すら分からない。1930年代の検閲は、ここまで来ていたのである。

矢内原忠雄の場合も、その著作が官権の介入をいかに多く受けたことか計り知れない。アジア・太平洋戦争下の矢内原の歩みは、検閲との闘いにあつたのである。検閲は彼の個人誌『嘉信』にまで及んだ。内務省や警視庁という権力の弾圧と矢内原の抵抗は、戦争が終わるまで続いた。彼は東大を離れた後は、個人誌『嘉信』をとりでに、時代批判の時評を書き、しばしば警視庁に呼び出され、訊問されるものの節を曲げることがなかった。

戦争は1943（昭和18）には、泥濘にはまりこみ、敗戦の色も濃くなった。9月には、三国同盟の一角、イタリアが連合国に無条件降伏した。翌1944（昭和19）年7月には東条内閣は戦線不利をもって総辞職、11月1日にはサイパン島から発進したB 29によって東京が偵察

され、同24日には、初空襲を受けている。戦場も後方も区別のない国民総動員の時代の中で、恒藤恭も矢内原忠雄も苦しんでいた。自由人であり、共に感受性の強い二人は、やりきれない思いを抱いていた。二人とも日本の敗戦を予見していた。こうした中で、矢内原忠雄の個人誌『嘉信』は、大危機を迎える。敗戦一年前の1944（昭和19）年の夏のことであった。警視庁検閲課から『嘉信』の廃刊を要請されたのである。

矢内原忠雄の闘いは、ここから本格化する。彼は自主廃刊を拒絶し、「これを廃するは、自分として国に忠なる所以でない」とし、警視總監に面談して、その志を述べ、「意見書」を手渡す。時の警視總監は薄田美朝^{すすきだよしとも}であった。薄田は1897（明治30）年秋田県出身。彼は矢内原の東大での後輩であり、警察畑を歩き、群馬や鹿児島^{鹿児島}の知事をつとめ、東条内閣で警視總監に就任、戦後衆議院議員となった人物である。

薄田への忠雄の意見書のさわりの部分を引用すると、「余は退官後月刊個人雑誌『嘉信』を発行し、基督教聖書の研究及び伝道に従事して今日に及べり。その間検閲の難を蒙ること数次に上りたりと雖も、字句の末端によらずして精神の所在を酌まるに於ては、余の言論のすべて一片憂国の至誠に出づるを察知せらるるに難からずと信ずるものなり。」「『嘉信』は実に国民の正しき信仰を培ひ、その精神力を旺盛ならしめ、道德心を堅実ならしむることを目的とするものなり。」「近頃当局は企業整備の一般的方針に基き、『嘉信』に対しても廃刊を勧告せられたり。『嘉信』は形小なれども国民の良心也、国の柱なり。『嘉信』を廃するは国民の良心を覆し、国の柱を除くに等し。」などとある。

矢内原忠雄は「意見書」を持って警視庁に出頭し、薄田總監に面会して所信を表明した『嘉信』は1944（昭和19）年12月号（第7巻第12号）まで刊行し、1945（昭和20）年1月から名を『嘉信会報』と変えて継続刊行されていく。誌名の変更は言うまでもなく当局への配慮であった。4月13日の空襲で印刷先の学園印刷所が空襲に遭うと、謄写版印刷で刊行を続け、敗戦に至っている。

矢内原忠雄はこうした経過を、「戦の跡」⁽¹⁹⁾に入念に記している。敗戦の年の六月には、「憲兵隊司令部から私の家に人が来て、『嘉信会報』殊に第3号を要求したが、何事も起らずして終戦を迎えた。戦争中「今度は矢内原を引張るぞ」という警察の威嚇的言辞が、私の耳に伝わったことも二、三度あったが、私は何の恐怖も感じなかったし、彼らは遂に一指をも私の身邊に触れることを得ず、『嘉信』の発行を一回も阻止するを得なかったのである」と彼は書いている。

V 戦後大学改革と平和運動のリーダー

第二次世界大戦後、恒藤恭と矢内原忠雄は共に戦後大学改革の使命を負うことになる。恒藤恭は大阪市立大学の学長に、矢内原忠雄は東京大学総長となり、大学改革に真剣に取り組む。

(19) 矢内原忠雄「戦の跡」『嘉信』第8巻12号、1945年12月、のち『私の歩んできた道』東京大学出版会、1958年3月31日収録を経て『矢内原忠雄全集』第26巻収録。103～117ページ

二人とも基礎学としての教養教育重視の立場に立った。

恒藤恭の戦後の新しい任務は、経済学者本庄栄治郎の学長辞任の後を引き継ぎ、大阪商科大学（のちの大阪市立大学）の学長職に就くことにあった。変革期の大阪商科大学の学長の資格には、戦前の行動が何よりも問われるところがあった。その点彼は思想弾圧をはねのけ、京都大学事件を闘い抜いた経歴をもつ。また、法哲学者としての高い評価があった。研究業績も申し分なかったのである。恒藤恭は1945（昭和20）年11月の教授会で学長に指名されると、熟慮の末、引き受ける。就任は翌1946年（昭和21）年1月26日、満58歳のことであった。

大阪商科大学の学長として恒藤恭が最初に行ったのは、就任翌月の1946（昭和21）年2月の教授会での教授全員の辞表提出決議に従い、半数を入れ替えるという画期的人事刷新にあった。むろんGHQの指令に基づき、文部省が前年12月5日に発していた「教員ノ解職並ニ再任用ニ関スル件」という指示が背後にあったとはいえ、よくぞここまでやったという感がしきりである。1949（昭和24）年4月に大阪市立大学が創設されると、恒藤恭は総長（のち、教育公務員特例法によって、「学長」と改称）に就任した。大阪市立大学は大阪商科大学を母体とし、大阪市立都島工業専門学校・大阪市立女子専門学校・大阪市立医科大学を吸収した6学部を包含する総合大学である。

大阪市立大学は中核の旧制大阪商科大学の単なる改造ではなく、まったく新しい大学としての理念と構想で始められた。それは恒藤恭の「市立大学の構想」（『大阪人』1950・1～3）という文章にはっきりと読み取れる。彼は新制大学における学問の基礎としての教養を重視した。彼の考える教養とは何か。これは極めて重要な問題であり、近年、飯吉弘子が精力的にこの課題に立ち向かっている。「恒藤恭の教養観——大阪市立大学創設時の教養教育理念理解のために——」⁽²⁰⁾ および「大阪市立大学初代学長 恒藤恭の教養観——「現代を生きる人」としての教養」⁽²¹⁾ がそれで、飯吉はそうした恒藤恭の教養観は、学長としての教育実践にも現れているとし、学長時代の8回の入学式式辞をも視野に入れた検討を示している。

教養重視、一般教養科目を重視しながらも、大阪市立大学は教養部を置かなかった。それは新制大学の多くが、教養部を専門学部の下に位置づけたのとは、対照的である。より具体的に説明するならば、大阪市立大学では6学部の教師それぞれが、一般教養を担当したのである。それは戦後の新制大学が教養部を置くことで、当学部所属の教員が、他の専門分野の学部所属教員に比べて、力がないように見られたり、学部所属の教員が、教養部所属の教員より一段ランクが上のように錯覚する現象へのアンチテーゼの意味もあったのである。

恒藤恭を学長とする大阪市立大学が、戦後の大学改革において教養部を置かなかったことは、先見性ある方策であった。恒藤恭は先の「市立大学の構想」で「大阪市立大学が特に教養部を

(20) 飯吉弘子「恒藤恭の教養観——大阪市立大学創設時の教養教育理念理解のために——」『大阪市立大学史紀要』第2号 2009年10月30日

(21) 飯吉弘子「大阪市立大学初代学長 恒藤恭の教養観——「現代を生きる人」としての教養」『有恒会報』第192号、2011年8月1日

設ける方針を採らなかったのは、かような弊害に陥ることを避け、新しい大学制度の革新的性格を尊重する志向に基くものに外ならない」と書いている。新制大学の発足時に教養部の〈弊害〉を早くも予見していたのは、やはり先見の明があったと言わざるを得ない。教養教育の意義を十分認めながらも、教養部という制度を否定し、専門学部の教員が教養教育を担当するというのは、当時にとっては画期的なことであったと言える。

他方、矢内原忠雄も戦後大学における教養教育構想に深く関わることになる。矢内原忠雄は1945年11月28日付で東京大学教授に復帰する。大学に戻った矢内原には、次々と重責が押し寄せる。まずは復帰翌年の1946(昭和21)年8月に社会科学研究所長となり、新しい研究所の創設に携わる。研究所が軌道に乗ると、経済学部長に選出される。その7ヶ月後、今度は新設の教養学部長に補せられる。東大は教養部ではなく教養学部の名称をとった。1949(昭和24)年5月31日のことである。

矢内原忠雄の教養学部長時代のことは、比較的多くの資料が存在する。1962(昭和37)年1月刊行の東京大学教養学部編の『教養学部報』は、矢内原忠雄追悼特集であり、その大半は『矢内原忠雄——信仰・学問・生涯——』⁽²²⁾に再録されている。また、近くは鴨下重彦ほか編『矢内原忠雄』⁽²³⁾に、池田信雄「教養学部の船出」と川西進「思い出の矢内原忠雄と教養学部」の二つの回想が収められ参考になる。新制大学における教養部は、一般に専門課程に進む前の2年間の教育課程である。東大の教養学部は、人文科学科・外国語科・社会科学科・自然科学科・体育科の5科体制から成っていた。教養学部所属の教員は、そのいずれかに所属し、一般教養科目を担当するのである。それは旧来の大学教育の反省から生まれた総合的視点を重視した教育課程であった。東大ではその上に立つての教養学科の構想も立てられ、実施されることになる。ここに「越境する知性」のキーワードで象徴される東大教養学部の後期課程は、矢内原忠雄が学部長時代に構想され、生まれたのである。

1951(昭和26)年12月14日、矢内原忠雄は南原繁の跡を継ぎ第16代東京大学総長となる。恒藤恭が大阪商科大学学長に選出された時、熟慮の末、引き受けざるを得なかったように、矢内原忠雄も慎重に考慮して、総長職を受諾したのであった。満58歳のことである。大学トップの就任は、恒藤・矢内原ともに働き盛りの58歳というのも、二人の共通項の一つとしてあげられる。大学総長はもとより激職である。彼はそれを見事にやり抜く。矢内原総長時代、東大はポポロ事件⁽²⁴⁾のような世間の目を引く事件があったものの、彼はそれらにも誠実にかかわっている。彼には日曜日ごとの目黒今井館での聖書講義があり、個人誌『嘉信』の編集という任務もあった。彼はそうしたことも十分考えた上で、総長職を「私の十字架」として引き受

(22) 南原繁・大内兵衛・黒崎幸吉・楊井克巳・大塚久雄編『矢内原忠雄——信仰・学問・生涯——』岩波書店、1968年8月3日

(23) 鴨下重彦・木畑洋一・池田信雄・川中子義勝編『矢内原忠雄』東京大学出版会、2011年11月2日

(24) ポポロ事件 1952年2月10日、東京本郷の東大構内で行われた学生劇団ポポロの発表会に、私服警官が潜入して学生に見つかり、警察手帳を取り上げられるという事態が生じた。事件は総長矢内原忠雄の国会喚問にまで発展した。

けたのである。

恒藤恭も矢内原忠雄も戦後の数年間は、さまざまな公的な仕事が舞い込み、まさに八面六臂の大活躍が続く。筆の人としての活躍もめざましいものがあった。二人の戦後著作の全貌を掴むのは容易ではない。内容は専門の論文のほか、新憲法に関するもの、世界平和に関するもの、時代に関するもの、大学や教育に関するものと幅広い。また、二人には多くの講演原稿がある。恒藤恭のばあい、近年ご遺族から大阪市立大学学術情報総合センター内の恒藤記念室に寄託された資料の中に多くの講演レジュメがあるのをわたしは確認している。矢内原忠雄のばあいは、講演原稿の他に多くの聖書講義ものもある。全集未収録のものも数多く、速記のまま残されているものもある。

恒藤恭と矢内原忠雄は、共に戦後平和運動のリーダーとしての存在も示した。一高同期の彼ら二人は、この場面でもしばしば共同歩調をとった。文献上確認できることをあげるなら、まず、戦後早い時期の1950年1月15日、二人は安倍能成・大内兵衛・末川博らと共に構成する平和問題談話会の名で、「講和問題についての声明」を発表、全面講和・中立不可侵・国連加盟・軍事基地反対・経済的自立を訴えた。この文面は岩波書店刊行の雑誌『世界』3月号に掲載された。この年6月25日にはじまる朝鮮戦争後、日本社会は反動と右翼化の道を歩むかに見え出す。1956（昭和31）年には、教育委員会が公選制から任命制へ、そして教科書検定の強化を目指した法案が政府によって提案されるという事態を迎える。矢内原忠雄には、それは教育の危機に映った。彼は他の同志——南原繁・木下一雄・大内兵衛・大浜信泉・安倍能成・内田俊一・蜷山政道・上原専禄・務台理作と諮って「文教政策の傾向に関する声明」、いわゆる十大学長声明を3月19日付で出す。同23日には、恒藤恭を含む関西13大学長がこれを支持する。さらに二人は、1958年5月28日の日付で、大内兵衛・茅誠司・清宮四郎・宮沢俊義・湯川秀樹・我妻栄との連名で、「憲法問題研究会設立の勧誘状」を各界有志に送り、その発起人に名を連ねることになる。二人ともこの研究会を足場に、積極的に憲法擁護の発言を続けることになる。

第二次世界大戦後の恒藤恭と矢内原忠雄の平和問題への関心は、常に重なっているかに見える。それは一高時代の蘆花「謀叛論」の聴講に始まり、戦前の苦い体験、——京大事件と矢内原事件が始原となった歴史認識の重みによるといってよいのであろう。

（せきぐち やすよし・文芸評論家、都留文科大学名誉教授）